

ぬ
か
漬
の
味

熊
澤
伸
昭

【あらすじ（800字程度）】

山形県の山沿いにある町で理容店を営む田辺春子は、自身が八月二十日の一日を繰り返すタイムループに陥っている事に気が付く。困り果てた春子は、離れて暮らす娘の菜摘に助けを求めるが話を信じてもらえず、認知症の症状と決めつけられた上、理容店も廃業する腹づもりでいる事を知ってしまう。春子は絶望するが、また同じ朝が来ると菜摘とのやり取りは無いものになっていた。すっかり諦めてしまった春子は境遇を受け入れようとすが、店に来た中学生の守に勘付かれて事情を話す。守は「与えられた使命を果たさなければ元に戻れない」と推測し、テレビニュースで観た栃木県宇都宮市のコンビニで起こる事故を未然に防ぎ、死ぬ運命の高校生を救う事がその使命だと言う。春子は困惑するが、取り敢えず守の計画を実行する事に決める。八月二十一日の朝、守は響くサイレンの音で目を覚ます。山から下りてきたクマが春子の理容店に侵入したという。春子はクマに襲われて死んでいた。守は、春子がクマに殺される結末を回避する為、平行世界を移動しているという答えにたどり着く。守の考え通り、春子は並行世界の八月二十日にいて、宇都宮市へと向かっていた。故を止める寸前、スマートフォンに位置情報に不審を抱いた菜摘から連絡が入り、目的を果たせないまま山形へと連れ戻されてしまう。その晩、菜摘の家泊まった春子は、自宅で救えなかったタイムループしない事に気が付く。

る決意をする。
かくして、夜明けに帰宅した春子は家に侵入したクマと鉢合わせする。
クマが襲いかかる瞬間、春子は八月二十日の朝に戻っていた。
再び宇都宮市へ向かった春子は、遂に死ぬ運命の高校生を救う事に成功する。
翌日、タイムループから解放された春子が生かされ、菜摘が待っていた。
家に帰ると菜摘の感謝の思いと、理容店を続けさせてほしいという胸のうちを話すのであった。

【登場人物表】

田辺春子 (72)	理容師
柏木守 (14)	中学生
藤田菜摘 (42)	春子の長女
藤田直輝 (48)	菜摘の夫
藤田彰 (17)	菜摘の長男
柏木奈緒子 (42)	守の母
阿部勇氣 (14)	中学生
広田翼 (14)	中学生
中村 (63)	豆腐店店主
フミエ (74)	婦人服店主
風間 (70)	春子の近隣住民
杉山 (79)	ミニバンの運転手
市村	タクシー運転手
二岡	タクシー運転手
三原	大型トラック運転手
守の祖父	
守の祖母	
守の曾祖母	

コンビニの客

コンビニ店員

男子高校生

タクシー運転手 A

タクシー運転手 B

旅館の仲居

天気予報士

実況解説者

ニュースキャスター

ニュースリポーター

事故現場の近隣住民

○理容店・店内

田辺春子（72）が営む理容店。
春子が豆腐店の店主である中村（63）
の髪を切っている。

中村「昨日の話、聞いたが？」

春子「何の話や？」

中村「芳雄の畑さ、クマ出だんだど」

春子「クマ出だ？」

中村「んだど。昨日の昼間、芳雄が畑さ行っ
たら、二メートルもあるでつかいクマが
トウキビば食ってだっけて。それで、芳雄
は慌てで駐在と猟友会ば呼ばたんだけん
と、山さ逃げらつて仕留めらんねっけど」
春子「んだの？ そしたら、まだ山から下り
で来るべした」
中村「んだぞ。んだがら、気を付けらんね
のよ」

○公民館・駐車場

移動スーパールの軽トラックが停まっ
ている。

生鮮食品を見る春子。

婦人服店のフミエ（74）が来る。

フミエ「春子ちゃん、こんにちは」

春子「あら、こんにちは」

フミエ「昨日、クマ出だっけて聞いたが？」

春子「聞いた、聞いた。芳雄くんの畑だべ？」

フミエ「んだど。おっかないったらね」

春子「町まで下りて来ねどいいんだげんと」

フミエ「んだぞ。何年か前、下りて来たっけ
ずね」

春子「んだ、んだ。あの時はニュースさなた
っけ」

フミエ「オラ、あの時、テレビさ映ったけぞ」

春子「んだっけね。インタビューばされて、
女優みだいだっけちゃ」

フミエ「まーだ、ほだな事ば言って」

春子「本当よー（笑う）」

フミエ「春子ちゃん、時間あるが？ うちで
お茶でも飲んで行げちゃ」

○ 婦人服店

フミエが営む婦人服店。
春子とフミエがお茶飲み話をしている。
フミエ「そしたら吾郎さ、「オウイの土地さ
勝手に入るな」って言ったんだど」
春子「ほだな事言ったの？ それは、お互い
様だべした」
フミエ「んだずね。それで、まだ揉めっだん
だど」
春子「隣同士で仲良くしたらいいべしたね」
フミエ「んだのよ」
春子「お茶を飲む。」
フミエ「漬物も食べでける」
春子「あら、美味しい事。漬物漬けるの上手だ
ずね。これは糠漬けが？」
フミエ「んだ。漬けた事ないが？」
春子「ない、ない。漬け方知やねもの」
フミエ「簡単よ。野菜ば糠床さ入れでおぐど、
ひとりでに漬かっから」
春子「んだの？」
フミエ「春子ちゃんも漬けでみだらいいべし
た。糠床ば分けでやるよ」
春子「ほだな、悪いちゃ」
フミエ「いいがら、いいがら。持って行って
けろ」

○ 農道

もらった糠床の容器を持って家路を歩
く春子。
畑の方から物音がする。
春子「…：何だべ？」
音のする方を見ると、害獣用の罠の檻
に動物が捕まっている。
春子「…：クマだべが？」
恐る恐る檻を見ると、キツネが入って
いる。
春子「あらら、キツネが。ちよっと待ってる
な。今、出してやっから」

春子が檻の入口を開けると、キツネが檻から飛び出てくる。

春子「あら、めんこいなー」

と、頭に手を伸ばすとキツネは逃げていく。

○ 集落の風景（夕）

集落に夕方のチャイムが鳴っている。

○ 理容店・家庭菜園（夕）

栽培したきゅうりを見る春子。

大きな実を選んでハサミで切る。

○ 同・台所（夜）

理容店兼用住宅の住居部分。

糠床にキュウリを入れる春子。

春子「これでいいんだが？」

春子、糠床をシンクの下に仕舞う。

○ 同・寝室

布団で眠る春子。

午前六時。

目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

○ 同・仏間

仏壇に手を合わせる春子。

亡くなった夫の写真が立ててある。

○ 同・台所

朝食を作る春子。

シンクの下から糠床を取り出し、キュウリを抜き出す。

水で洗い、包丁でひと口大に切る。

○ 同・居間

日めくりカレンダーを破る春子。

八月二十日。

座卓にご飯や味噌汁と共に糠漬けの小皿が並んでいる。

テレビをつける春子。
天気予報士の声「今日は、今年一番の暑さになりそうですので、熱中症にお気を付け下さい」

春子「（味が薄い）んー？」
糠漬けを食べる春子。

○タイトル『ぬか漬の味』

○理容店・店内

春子が開店の準備をしていると、風間（70）が入ってくる。

風間「やってだが？」

春子「ちよっと待ってける」

待合椅子に座る風間。

風間「今日も暑いね」

春子「んだね。今年一番だって、テレビで言っただけ」

風間「嘘だべ？ 昨日も言っただけぜ」

春子「毎日同じ事ば言っただのんねが」

風間「んだな。今年はどこまで暑くなるんだがよ」

春子「はい、どうぞ」

風間、理容椅子に座る。

春子「同じでいいが？」

風間「うん」

風間の首にクロスを巻いて、霧吹きで髪を濡らす春子。

風間「今日、勝ぶどいいね」

春子「ん？ 何や？」

風間「何て、高校野球よ。酒田湊高校の準備決勝だべした」

春子「今日あるんだっけが？」

風間「んだず。昼からよ」

春子「相手は強いのが？」

風間「東京の大洋学院って、常連校だ」

春子「んだら、一生懸命応援さんなねべした」

風間「んだず。んだがらオラ、昨日からビールば冷やしたんだ」

春子「ほっだな、ビールば飲むだけなの

んねんだが？」

風間「それもあるな（笑う）」

春子「んだ、お前、糠漬けの漬け方って分がるが？」

風間「糠漬け？ なしてや？」

春子「フミエちゃんから糠床ば分けでもらったがら、キュウリば漬けでみだんだげんと、何だが上手く漬からねみだいでよ、さっぱり味すねんだ」

風間「いつから漬けたのや？」

春子「昨日の晩方」

風間「ちゃんと塩で揉んでがら糠さ入れだがや？」

春子「塩で？ 揉んでいね」

風間「んだべ。んだがら漬からねんだ」

春子「塩で揉まねど駄目だっけのが。なるほどな。今日の夜やってみるべ」

○同・居間

テレビで高校野球を観ている春子。

九回表、山形県代表の酒田湊高校が4

対3で勝っている。

相手校の投手が振りかぶって球を投げる。

春子「ほら、打て！」

打者、フルスイングで空振りする。

春子「あー！」

実況の声「ストライク、三振、バッターアウ

ト！ 九回の表が終わりました！ 現在

4対3。山形県の酒田湊高校が優勢のまま、試合は九回裏を迎えます！」

春子「頑張ってるよ！」

店の方から「こんにちは」と、声が聞こえる。

春子「はい」

○同・店内

入口に柏木守（14）が立っている。

守「こんにちは」

春子「いらっしゃい。椅子さ座ってける」

守、理容椅子に座る。
春子「テレビばつけどもいいが？」
守「はい」

春子、テレビの電源を入れると、守に
クロスを巻く。
春子「どだな髪型にするべ？」
守「…ボウズにして下さい」

春子「ボウズ？」

守「はい。お願いします」

春子「いいげんと、今よりやんばい見た目変
わるよ」

守「大丈夫です」

春子「一分刈りでいいが？ それとも五厘
か？」

守「…似合う方で」

春子「んだら、一分でが」

春子、守の髪を霧吹きで濡らし、クシ
でとかす。

春子「守くんだよ。学校で友達出来だが？」

守「別に友達とかいらないうで、大丈夫です」

春子「…夏休みはいつまでや？」

守「今日までです」

春子「んだら、明日から学校が？ 夏休み長
くて、学校さ行ぐのやんだぐなったのん

ねが？」

守「「やんだぐなった」ってどういう意味で
すか？」

春子「「嫌になった」のんねが？」

守「別にそんな事ないです」

春子「んだらいいげんと」

春子、電気バリカンを手に取り、電源
を入れる。

守「…（緊張の表情）」

守の頭に電気バリカンを入れる手前で、
手を止める。

春子「ちよつと待ってな。野球が気になって
集中出来ね。間もなぐ終わるべさげ、ち

よつと観でもいいが？」

守「大丈夫です」

春子、テレビの音量を上げる。

実況の声「試合は九回の裏、4対3で酒田湊
高校がリードしています。後を追う大洋
学院の走者は2塁3塁。2アウト2スト
ライクのフルカウント、バッターは四番
の大山です。さあ、緊張の瞬間！」
投手が振りかぶって球を投げる。
打者がバットを振ると、金属音が響く。
実況の声「おおっと、これは打ち上げた！
このボールをキャッチすれば、酒田湊高
校、念願の準決勝へと駒を進めます」
春子「よし！ちゃんと取れよ！」
実況の声「右翼手がフライを取り損ねる。
実況の声「落ちた、落ちました！」
春子「ありゃ！」
実況の声「三塁の高梨が走ります！ホーム
イン！大洋学院、ここに来て4対4の
同点、続けて俊足の近藤が三塁ベースを
踏んでホームへと帰ります！追加点を
決める事が出来るか！」
春子「ほら、早く投げろちゃ！」
実況の声「ライトの窪田がバックホーム！
間に合うか？近藤、走る！走る！
今、ホームベースを踏み込み込みまし
た！大洋学院、4対5で逆転勝利で
す！」
春子「うわー、負けだ！なしてだず！：
ごめん、ごめん」
と、落胆しながら電気バリカンの電源
を入れる。
守「すみません。やっぱり、ボウズやめます」
春子「えっ、やめる？」
守「前と同じにします。前髪が眉毛にかかる
位、横は耳が半分出る程度にして下さい」
春子「オラ、何が悪い事言ったが？」
守「別にそうじゃないです」
春子「んだら、なしてや？」
守「実は、今日の高校野球で酒田湊高校が勝
つたら思いきってボウズにしようと思っ
ていたんです。でも負けたからやめます」
春子「んだのが」

守「面倒臭くてすみません」
晴子「別にいいんだげんとよ。んだら分がた。

前髪が眉毛さかがる位な」

春子、電気バリカンを置き、ハサミで
守の髪を切り始める。

テレビから事故を伝えるニュースキャ
スターの声が聞こえる。

キャスターの声「今日の午前十一時頃、栃木
県宇都宮市のコンビニエンスストアに七
十代男性が運転する車が突っ込む事故が
発生しました。この事故で、十代から五
十代の男女五人が重軽傷者を負って病院
へと搬送されました。警察によると、車
を運転していた男性はこの事故に対し、
車の操作を誤ったとの内容を語っている
そうです」

○同・外（夜）

店の明かりが消える。

○同・台所（夜）

キュウリを塩で揉んで糠床に入れる春
子。

春子「明日こそは上手ぐ漬かるべ」

○同・寝室

布団で眠る春子が夢でうなされている。
午前六時。

目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

○同・台所

朝食を作る春子。

シンクの下から糠床を取り出し、キュ
ウリを抜き出す。

水で洗い、包丁でひと口大に切る。

○同・居間

日めくりカレンダーを破る春子。

八月二十日。
座卓にご飯や味噌汁と共に糠漬けの小

皿が並んでいる。
テレビをつける春子。
天気予報士の声「今日は、今年一番の暑さになりそうですので、熱中症にお気をつけ下さい」

春子「……はてな、なして漬からねんだ？」

○同・店内

春子が開店の準備をしていると、風間が入ってくる。

風間「やってだが？」

春子「ちよっと待ってけろ」

待合椅子に座る風間。

風間「今日も暑いね」

春子「んだね。今年一番だって、テレビで言っただけ」

風間「嘘だべ？ 昨日も言っただけぜ」

春子「毎日同じ事ば言っただのんねが」

風間「んだな。今年はどこまで暑くなるんだがよ」

春子「はい、どうぞ」

風間、理容椅子に座る。

春子「お前に言われだ通り、キュウリば塩で揉んでみだんだげんと、やっぱり漬からねみだいだな」

風間「ん？ 何の話や？」

春子「何って、糠漬けよ」

風間「糠漬け？」
春子「昨日お前さ、糠漬けの漬け方ば聞いたべした」

風間「俺さ？ 昨日？ 何処で？」

春子「何処でって……あれ？ お前、昨日も来ねっけが？」

風間「こだなハゲ頭、毎日来る訳ないべした。なんだ、ボケだのんねんだが？ しっかりしてけるね」
春子、訳が分からず笑って誤魔化す。

○同・外

守「……」
『本日休業』の看板を見る守。

○同・居間

テレビで高校野球を見る春子。
実況の声「近藤、走る！ 走る！ 今、ホームベースを踏み込みました！ 大洋学院、4対5で逆転勝利です！」
春子「嘘だべ……」

○同・台所

キュウリを塩で揉む春子。
春子「何から何まで昨日ど同じだ。くだな事ってあるんだべが？……くたびれっだのがな。これは早く寝だ方がいいな」

○同・寝室

布団で眠る春子が夢でうなされている。
午前六時。
目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

○同・台所

朝食を作る春子。
シンクの下から糠床を取り出し、キュウリを抜き出す。
水で洗い、包丁でひと口大に切る。

○同・居間

日めくりカレンダーを破る春子。
八月二十日。
カレンダーを二度見する春子。

春子「……」

手に持っていた小皿から糠漬けを取って食べる。

春子「……」

○同・店内

入口のドアを見ている春子。
風間が入ってくる。
風間「やってだが？」

春子「……やっぱり」
風間「何した？」

○豆腐店

中村が営む豆腐店。
春子が来る。

中村「いらっしゃい」

春子「こんにちは。木綿ば二つど、油揚げば
けねが」

中村「はいよ」

と、豆腐を掬う。

中村「間もなく試合開始だね。今日も勝ぶん
ねがい」

春子「うん。勝ぶどいいね」

中村「何だが、元気ないみだいな？」

春子「ほだな事ないよ」

中村「ちゃんと応援してけろね」

○理容店・台所

油揚げを煮る春子。

おひつの白米に酢と砂糖を混ぜて酢飯
を作る。

冷ました油揚げに酢飯を詰めていなり
寿司を作る。

○農道

リュックサックに結んだ熊鈴をリンリ
ンと鳴して春子が歩いていく。

○森

森の入口に鳥居が立っている。

鳥居をくぐり、森に入っていく春子。
暫く歩くと、稲荷神社が見える。

○稲荷神社

巻物をくわえた狛狐の横を通り、お社
に立つ春子。

いなり寿司を供えてお祈りをする。

春子「オラに悪い所があったならば謝ります。
どうか元さ戻して下さい。この通り、お

願います」

○理容店・台所（夜）

春子「明日こそ、明日だべな」

○同・寝室

布団で眠る春子が夢でうなされている。
午前六時。
目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

○同・居間

日めぐりカレンダーを破る春子。
八月二十日。
春子「これは仕方ないな」

× × ×
電話をかける春子。

電話口に孫の藤田彰（17）が出る。

彰の声「はい、藤田です」

春子「もしもし、彰が？ □□（地名）の婆ちゃんだったけ」

彰の声「うん」

春子「元気にしったが？」

彰の声「うん。婆ちゃんは？」

春子「オラも元気だ。お母さんいだが？」

彰の声「うん、いる。ちょっと待って」

保留音に続き、春子の娘である菜摘

（42）が出る。

菜摘の声「もしもし、お母さん？」

春子「菜摘が？ 朝から電話してごめん」

菜摘の声「何？ どうかしたの？」

春子「うん。実はよ、菜摘さ大事な話があつてよ」

菜摘の声「大事な話？ 何？」

春子「うん。電話で言うのもアレだがら、今日、家さ来てけねが？」

菜摘の声「え？ 今日？」

春子「んだ」

菜摘の声「日曜では駄目？」

春子「今日来てもらいたいのよ」

菜摘の声「日曜では駄目？」

春子「今日来てもらいたいのよ」

菜摘の声「明日なら都合がいいけど」
春子「いや、どうしても今日来てける。この
通り、お願いします」

菜摘の声「分かったわよ。随分強引なのね。
夜になるけど、それでもいい？」
春子「うん。今日のうちならいつでもいい」

○豆腐店

春子が来る。

中村「いらっしゃい」

春子「こんにちは。油揚げと糸コンばけねが」
中村「はいよ。間もなく試合開始だね。今日
も勝ぶんねがい」

春子「うん。勝つどいいな」

中村「何だが、元気ないみだいな？」

春子「ほだな事ないよ」

中村「ちゃんと応援してけるね」

○理容店・台所

油揚げと糸コンニヤクを刻む春子。

椎茸やゴボウ、人参を切って、五目ご
飯を作る。

○同・居間（夜）

三人分の食器を用意する春子。

家のチャイムが鳴る。

春子「はい」

○同・玄関（夜）

菜摘とその亭主の直輝（48）が立っ
ている。

菜摘「こんばんは」

直輝「こんばんは」

春子「こんばんは。忙しいのに、来てもらっ
て悪れっけな」

菜摘「別にいいわよ」

春子「晩げのご飯ば用意したから、食って
けろ」

菜摘「え？ 食べてきちゃったけど」

春子「混ぜご飯だけでも食わんねが？」

直輝 「俺は頂こうかな」
菜摘 「それなら私も少しだけ」

○同・居間（夜）

菜摘 「五目ご飯を食べる春子と菜摘と直輝。
菜摘 「お母さん、日中はエアコンつけてる？」
春子 「つけっただよ」

菜摘 「本当に？ 電気代ケチって暑いのが我慢
してるんじゃないの？ そういうのやめてよ。それで熱中症になったんじゃない、元
も子もないからね」

直輝 「そうですね。昔と今とじゃ、夏の暑さが
違うって言いますから」

春子 「分がた」

菜摘 「あと、スマホは持ち歩いてる？」

春子 「ケータイが？ オラ、持って歩いても、
使い方知やなくてよ」

菜摘 「別に使い方なんて知らなくていいの。
ただ、持ち歩いてさえいてくれればいいのよ。
見守りアプリを入れてあるから、
スマホさえ持っていれば、お母さんが何
処にいて何をしているかが分かるの」

春子 「んだのが」

菜摘 「それだけで安心出来るんだから、持ち
歩くようにしてよ」

春子 「分がた」

菜摘 「それで？ 大事な話って何なの？」

春子 「…：うん」

菜摘 「もったえぶらないで言ってよ」

春子 「…：これはオラの父ちゃんが聞いた
話なんだげんと、昔、この町で神隠しが
あったんだそうだ」

菜摘 「神隠し？」

春子 「んだ。オラの父ちゃんの幼なじみさ登
美子ちゃんっていう娘がいたんだっけど。
ある日の朝、登美子ちゃんがなかなか起
ぎで来ねもんだが、母親が起こしに行
ったど。そしたら、布団が敷かれたまん
ま、登美子ちゃんがいねぐなっていたん
だっけど。家の周りば探しても見つから

ね、町の中ば探しても見つからね、山の中まで探したんだげんと何の手掛かりも見つからねんだっけど」

直輝 「それでどうなったんですか？」

春子 「何日か経って、話ば聞きつけた神主が家さ来たど。神主は登美子ちゃんの父親さ「キツネから祟られる事ばすねっけが」って聞いたど。そしたら父親は驚いて「実は登美子がいねくなる前の日に、オライの敷地さ入って来たキツネが猫いらずば食って死んだんだ」って言ったど。そしたら神主は「そのキツネの祟りで神隠しさあったんだ」って、家族ば集めてお祓いばしたど。そしたら登美子ちゃん、その日のうちにひよっこりと帰って来たんだっけど。それから何日かして、オラの父ちゃんが登美子ちゃんさ「お前、何処さ行ってだっけの」って聞いたど。そしたら登美子ちゃんは「はっきりと覚えていねんだげんと、こことは別の世界さ行ってだ気がする」って答えたんだど」

直輝 「不思議な話ですな」

春子 「昔からキツネにはそういう力があるって話よ」

菜摘 「ちよっと待って。もしかして私たち、怪談話を聞かされる為に呼ばれた？」

春子 「んね、そういう訳ではなくて」

菜摘 「それじゃ、一体どういう訳？」

春子 「：：もしかしたらなんだげんと、オラも別の世界さ行ってしまったのがもすんねのよ」

菜摘 「あらやだ：：えっ？ どういう事？」

春子 「オラ、この間、たまたまキツネさ会ってしまったのよ。それから、何だが様子がおかしいんだな」

菜摘 「おかしいって、どういう事よ」

春子 「何て言ったらいいのかわ、夜に寝て、朝に起きると次の日になるべした、通常は」

菜摘 「そうね」

春子 「だけどオラ、なんとも不思議なんだげ

んと、ここ何日かは朝に起きても前と同じ日なのよ」

菜摘 「：：何言ってるか、分かる？」

直輝 「つまり、お義母さんは同じ日を繰り返していらっしゃるんですか？」

春子 「んだ」

菜摘 「えっ？ そうなの？」

直輝 「そして、そうなるのはキツネの祟りだつて、そういう話ですか？」

春子 「んだのよ。んだから、お祓いばすっだいのよ。お願いださげ、オラば大きい神社さ連れで行ってけねが？」
顔を見合わせる菜摘と直輝。

○同・寝室（夜）

菜摘 が春子の布団を敷いている。

菜摘 「明日は朝早いんだからもう寝ましょう。ほら、布団に入って」

菜摘 「それじゃ、電気消すわよ。おやすみなさい」

と、明かりを消して部屋から出ていく。
春子 「んだ、糠漬けば漬けらんね」

○同・居間（夜）

菜摘 が、テストの答案用紙を取り出し、採点を始める。

直輝 「おいおい、こんな所でも仕事か？」

菜摘 「終わらないんだから仕方ないじゃない」
答案用紙に丸を付ける菜摘。

菜摘 「凄い、今回も百点」

直輝 「頭の良い子なんだ」
菜摘 「うん。うちの塾に来てから、全部のテストで百点取ってる」

直輝 「へえー、凄いな」
菜摘 「母親も超頭良かったから、そういう血筋なんだと思うけど」

直輝 「知ってる人なんだ」
菜摘 「うん。私の幼なじみ。小中高とずっと

一緒だったけど、ずっと学年で一番だった。東京の大学に進学して、就職して結婚したんだけど、今年の春に離婚して、この子連れて帰ってきたの」

直輝 「そうなんだ」

菜摘 「でも、そういう事もあってか、この子、守くんっていうんだけど、学校で浮いてるみたいなの」

直輝 「そりゃ、東京から来て、すぐには馴染めないと思うよ」

菜摘 「でもあの子、友達を作るのが苦手なタイプみたいだし、なんだか心配だよ」

直輝 「俺も転校生だったから分かるけど、子どもなんて何かのきっかけで、いつの間にか周りに溶け込んでいるもんだよ。だから、そんなに心配しなくてもいいと思うよ」

菜摘 「あなたの時代と今とじゃ、訳が違うわよ。なんだか守くん、だんだんと痩せてきている気がするし」

直輝 「イジメにあっているとかな？」

菜摘 「それは分からないけど」

直輝 「そんなに心配なら、それとなく聞いてみたらいいんじゃないか？」

菜摘 「そうね、今度聞いてみるわ。しかし驚いたわね、同じ日を繰り返してるだなんてさ」

直輝 「お義母さんの事か」

菜摘 「そういうのなんて言うんだっけ？ タイムスリップ？」

直輝 「タイムリープとか、タイムループとか言うんじゃないか？」

菜摘 「どういう事だと思う？」

直輝 「スマホで調べたら、認知症の人が体調する症状だって書いてあったよ」

菜摘 「やっぱりそういう事よね。いつかはこうなると思ってたけど。お父さんが死んで八年？ こんな、人よりもタヌキの方が多い限界集落で、一人でよくやっってきたわよ」

直輝 「明日、病院に連れて行くんだろ？」
菜摘 「そうね、そのつもり。でもさ、いざ認知症って分かったらどうする？」

直輝 「え？」
菜摘 「このまま一人暮らしをさせる訳にはいかないじゃない。だからと言って、うちで看れる訳でもないし。そしたらやっぱり、お母さんには施設に入ってもらえないわよね」

直輝 「そうなるか」
菜摘 「したらこの家は？ どうせならお母さんがはつきりしているうちに処分した方が楽じゃない？」

直輝 「それはお義母さんの考え次第だろ」
菜摘 「何言ってるの。のんびりやって、後で後悔するのは私たちなのよ」

直輝 「そうかもしれないけどさ」
菜摘 「問題は果たしてこの古い家が売れるかどうかよね」

直輝 「言う程、古くないだろう？」
菜摘 「古いわよ。よくよく見るとボロボロよ。二階は雨漏りするし、勝手口なんてちゃんと閉まらないじゃない。リフォームするとしたら結構お金が掛かりそうよね。かと言って、家を壊して更地にすると固定資産税が上がるって言うし、悩み所だわ。そうだ、あなたの知り合いに不動産屋の人がいたでしょ？ 話を聞いてみてよ」

直輝 「まだ、お義母さんが認知症って決まった訳じゃないのに、気が早いよ」

菜摘 「何よ、先に言い出したのはそっちじゃない」

直輝 「そうだけどさ」
菜摘 「でも、いずれにしたって床屋は廃業よね」

○同・台所（夜）
春子 「……」

明かりを消したままキュウリを塩で揉

む春子。
居間での菜摘と直輝の会話を聞いている。

菜摘の声「いつかはその話をしなきゃと思っ

ていたから丁度いいタイミングだわ」

直輝の声「お義母さん悲しむだろうな」

菜摘の声「って言うか、七十過ぎた婆さんが
ハサミを握ってたら、それはもう犯罪じ

ゃない？」

直輝の声「言い過ぎだよ」

菜摘の声「そうかしら？ 結構、本心なんだ

けど」

直輝の声「それじゃ、俺は帰るよ」

菜摘の声「明日は九時まで来てね」

春子「……」

○同・寝室
布団で眠る春子が夢でうなされている。
午前六時。
目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

○同・台所
朝食を作る春子。
シンクの下から糠床を取り出し、キュ
ウリを抜き出す。
水で洗い、包丁でひと口大に切る。

○同・居間
春子「菜摘、ご飯出来だよ」
と、ふすまを開ける春子。
部屋を見ると菜摘の姿は無い。
春子「……はっ！」
日めくりカレンダーを破る春子。
八月二十日。

×
一人で朝食を食べる春子。
×
糠漬けに醤油をかける。

○同・店内
待合椅子に座る春子。

風間「やってだが？」
春子「いらっしやい」

○ 柏木家・奈緒子の部屋

守の母親でシステムエンジニアの奈緒子（42）がパソコンでプログラムを打っている。
守が入って来る。

守「お母さん、ご飯だつて」
奈緒子「ごめん。ちよつと手が離せない」

守「仕事？」

奈緒子「うん。今日中に仕上げちゃいたいんだけど、どっかのコードが間違っているみたいで、ループするんだよね」

守「それって、無限ループ？」

奈緒子「うん。知ってる？」

守「前にお父さんに聞いた。見てもいい？」
と、パソコンの画面を見る。

奈緒子「守、コード読めるの？」

守「：：うーん。全然、分からない」

奈緒子「そりゃそうだ。ご飯は適当に食べるから大丈夫つて、お婆ちゃんに言つておいて」

○ 同・居間

守とその祖父、祖母、曾祖母がそうめんを食べている。

祖母「守、サバ缶いらねが？」

守「いらぬ」

祖父「遠慮すねで食べちゃ」

と、守の麵つゆにサバの水煮を入れる。

守「あつ：：」

曾祖母「守、髪おがったのんねが？」

祖父「んだな」

守「おがった」つて何？」

曾祖母「じえねばけっさげ、床屋さ行つてこいちゃ」

守「えっ？ えっ？」

祖母「床屋で髪ば切つてこいつて」

守「えーっ」

○河原

阿部勇氣（14）と広田翼（14）が土手で釣りをしている。

翼「全然釣れないんだけど。暑いし、もう帰らない？」

勇氣「もうちよっと」

翼「暑いよー。熱中症になるよー」

勇氣「釣り竿を上げる。」

翼「また餌を取られた」

勇氣「翼、何か落ちているのに気付く。」

翼「おっ？ おっ？」

勇氣「何？ ヘビでもいた？」

翼「いえーい、財布拾った！」

と、財布を見せる。

勇氣「マジ？ 幾ら入ってる？」

翼「財布の中を見る翼。」

勇氣「：一円も入ってない」

翼「何だよ、ゴミじゃん」

翼「財布を投げ捨てる。」

橋の上を守が歩いて行く。

翼「あれ、柏木じゃね？」

勇氣「ん？ 本当だ」

翼「守に声を掛ける。」

翼「おい！ 転校生！」

守、河原の二人に目を向けるが、無視する。

翼「シカトした。何だよ、アイツ！」

翼「土手を駆け上る。」

後を追う勇氣。

翼「おい、無視すんなよ！」

と、守を捕まえる。

守「何？ 何か用？」

翼「お前に用なんかねえよ」

守「だったら構わないでよ」

勇氣「柏木は東京出身だよな？ そしたら、今日の高校野球は東京の大洋学院を応援

すんの？ それとも山形の酒田湊高校？」

守「別にどっちも応援しないけど」

翼 「どっちか応援しろって言われたら、どっちを応援するんだよ」

守 「誰がそんな事言うの？」

翼 「偉い人だよ」

守 「偉い人って誰？」

翼 「そりゃ、大統領だろが！」

守 「日本に大統領はいないけど」

翼 「：：アメリカ大統領だよ！」

守 「何でアメリカ大統領が日本の田舎の中学生にそんな事言う訳？」

翼 「だから、もしもの話だって。お前、面倒臭いな」

勇氣 「分かった。だったら、酒田湊高校と大
洋学院のどっちが勝つと思う？」

守 「：：まあ、これまでの成績で考えれば、
大洋学院だと思うよ」

翼 「結局、大洋学院を応援するんじゃないか」

守 「してない。客観的に見てだよ」

勇氣 「分かった。柏木は大洋学院が勝つと思
っている訳ね？」

守 「うん」

勇氣 「それなら賭けようぜ。俺は酒田湊高校
に賭けるから、お前は大洋学院に賭ける
よ」

守 「賭けるって、何を賭けるの？」

勇氣 「もし俺が負けたら、学校のワイフアイ
のパスワードを教えてやるよ」

翼 「お前、そんなの知ってるの？」

勇氣 「知ってる。兄貴に聞いた。どう？ ス
マホだけが友達のお前には嬉しい話なん
じゃないの？」

守 「：：分かった。乗る」

勇氣 「そしたら、お前は何賭ける？」

守 「何でもいいの？」

勇氣 「いいよ。でも、俺の納得いくものね」

守 「それじゃ、もし僕が負けたら：：頭をボ
ウズにする」

翼 「えっ？ お前がボウズ？ ヤバっ！」

守 「どう？ 文句ある？」

勇氣 「お前がそれでいいなら、いいよ」

守「それじゃ決定。約束守ってよ」

守、行く。

翼「なんかアイツ、闇深くない？」

勇氣「かなり深い」

○個人商店・外

守がアイスクリームを食べながらスマ

トフォンで高校野球を見ている。

実況の声「九回表、酒田湊高校の攻撃。バッ

ターは四番、荻野です。大洋学院のピッ

チャー、投げました！ 打った！ これ

は大きい！ 入るか、入るか、入った

！！ ホームラン！ 山形の酒田湊高校、

逆転です！」

守「あー、もう駄目じゃん。ボウズだ、ボウ

ズ決定だ！ もう最悪っ！」

○理容店・居間

テレビで高校野球を観ている春子。

春子「こだい暑い中を頑張ったって、勝たん

ねものは勝たんねんだ」

店の方から「こんにちは」と、声が聞

こえる。

春子「はーい」

○同・店内

入口に守が立っている。

守「こんにちは」

春子「いらっしゃい。椅子さ、座ってける」

守、理容椅子に座る。

春子「髪型はどうするべ？」

守「：：ボウズにして下さい」

春子「ボウズが？」

守「はい。お願いします」

春子「いいげんと、野球負けるよ」

守「え？」

春子「あ、いや、何でもない」

守「どうして知っているんですか？」

春子「：：勘よ、勘」

守「違います。僕が野球の勝ち負け次第でボ

ウズにするって、どうして知っているんですか？」

春子「……なしてだべ」

守「もしかして、阿部に聞いたんですか？　　そうですよね？　あの野郎！」

春子「んね、んね、違う」

守「そしたら、広田？　　あのおしゃべり！」

春子「んねの」

守「それじゃ、誰ですか？」

春子「……守くんから聞いたんだ」

守「僕？　　嘘だ、誰にも言っていない」

春子「信じでけねがもすんねげんと、オラ、同じ日ば何回も繰り返したのよ。それで、前に来た守くんから聞いたの」

守「……それって本気で言ってますか？」

春子「……言ってるだ」

守「……」

春子「ちよっと、テレビばつけるね」

と、テレビの電源を入れる。

春子「もう間もなく、ライトフライは落どして逆転負けすっから、観てみる」

実況の声「バッターは四番の大山です。さあ、緊張の瞬間！」

投手が振りかぶって球を投げる。

打者がバットを振ると、金属音が響く。

実況の声「おおっと、これは打ち上げた！　このボールをキャッチすれば、酒田湊高校、念願の準決勝へと駒を進めます」

右翼手がフライを取り損ねる。

実況の声「落ちた、落ちました！　三塁の高原、ここにきて4対4の同点、続けて俊足の近藤が三塁ベースを踏んでホームへと帰ります！　追加点を決める事が出来るか！　ライトの窪田がバックホーム！　間に合うか？　近藤、走る！　走る！　今、ホームベースを踏み込み込みました！　大洋学院、4対5で逆転勝利です！」

守「凄い！　当たった！」

春子「もう何回も観っただが分がるんだ。信じでけっか？」

守「でも、どうしてそうなったんですか？」

春子「なしてだべね？ オラにも分がらね」

守「元に戻りたいですか？」

春子「んだね。元さ戻るなら戻りだいげんと、無理だっていうのなら、別にこのままでもいいのんねがなって思うぐなつよ。ほら、今までだつて、ちよつとずつ違うだけで、同じみだいな毎日の繰り返しだっけがら」

守「どうして戻れないって思うんですか？」

春子「それは、オラだつて色々試してみだがら」

守「そしたら、どうやって同じ日に戻るか分かりますか？」

春子「つて言うど？」

守「どういうタイミングで戻るのかつていう事です」

春子「何時になったら戻るがつて事が？」

守「そうです」

春子「それは分がらねな。朝起きつど、戻さ戻つてるんだ」

守「それじゃ、寝ないで朝まで起きていますか？」

春子「それは試してねえな」

守「朝まで起きていたら明日になるんじゃないですか？」

春子「なるほど。ほだな事、考えでもみねがつた！ 守くん、賢いな！ 早速今日試してみよう。ありがとうな！」

守「もし、それでも繰り返し返すようなら、明日つて言うか、次の日の僕に「タイムループして困つてゐるから助けて」つて言つて下さい。多分、信じると思うので」

春子「分がつた。その時は頼むね」

○同・居間（夜）

柱時計が午後十一時を伝える。
お茶を飲みながら春子がテレビのニュ

リス番組を見ている。
リポーターの声「こちらは栃木県宇都宮市にあるコンビニエンスストアの前です。ご覧の通り、店にはビニールシートが被せてあります。今日の午前十一時頃、この店に、市内に住む男性が運転する車が突入しました」
テレビ画面、視聴者提供の事故直後の画像。
店舗にミニバンが突っ込み、滅茶苦茶になった様子が分かる。
春子「あらー」
リポーターの声「この事故で、車の下敷きになった男子高校生一人が死亡した他、四人の男女が重軽傷を負いました」
近隣住民の声「ドーンって、大きな音がしたから、外に出てみたら、大きい車が突っ込んでいてね。もう、店は滅茶苦茶だし、悲鳴は聞こえるので酷い状況だったよ。この店はこの間もコンビニ強盗が入ったばかりだし、悪い事が続いて、なんだかかわいそうだよね」
リポーターの声「運転手は見ましたか？」
近隣住民の声「見たよ。お爺さんだったね」
リポーターの声「どんな様子でした？」
近隣住民の声「なんだか、心ここにあらずっという顔をしてたよ」
リポーターの声「警察は車を運転していた栃木県宇都宮市の無職・杉山一郎容疑者七十九歳を過失運転致傷の疑いで逮捕しました。調べによると、杉山容疑者は「店で、会計に割り込んだ事を注意されて気が立っていった。運転に集中出来ず、バツクするつもりが前に進んでしまい、店に突っ込んでしまった」との内容を供述している模様です」
× × ×
柱時計が午前三時を伝える。
テレビでは通販番組を放送している。

うとうとする春子。
台所の方から物音がする。
春子「……何だべ？」
と、立ち上がって部屋を出ていく。

○同・寝室

布団で眠る春子が夢でうなされている。
午前六時。
目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

○同・居間

日めぐりカレンダーを破る春子。
八月二十日。

朝食を食べながら夜の事を振り返る。
春子「ごさ座ってだっけ。テレビば観っ
っけ。お茶ば飲んでだ。三時さなった。
その後……」

と、台所の方を見る。

○同・台所（夜・イメージ）

朧気な記憶。
真っ暗な中を大きな影が迫ってくる。

○同・居間

頭を抱える春子。
春子「……駄目だ、思い出さんね」

○同・店内

守「こんにちは」
と、守が入ってくると、春子が立っ
ている。

春子「守くん、いらっしやい。さあさあ、こ
さ座ってける」

守「……え？」
春子「どうぞ」

守、待合椅子に座る。
春子「お菓子とジュースを出す。
暑いっけべ、飲んでけるちゃ」

守、ジュースを飲み干す。
春子「ジュースを注ぐ。」

守「それって、寝落ちじゃないですか？」
春子「んねってば」
守「気が付いたら前の日に戻っていたって事ですか？」
春子「んだ。いつもと同じく、朝六時に布団の中で目が覚めたのだ」
守「…なるほど」
春子「何か分かった？」
守「もしかしたら、無限ループにハマっているのかも」
春子「何や？」
守「プログラムのエラーです」
春子「それは、何したらいいの？」
守「プログラムだったら、間違っている所を探して直すんだけど、それが人間の場合はどうしたらいいんだろう？」
春子「んんっ？」
守「…もしかしたら、何かを変えないといけないのかもしれない」
春子「変えるって、何ば変えるのや？」
守「例えば…歴史とか」
春子「はっ？」
守「何て言うか、おばさんには何か与えられた使命があって、それをクリアしないと戻れないんじゃないかと思えます」
春子「何て？」
守「だから、おばさんには、何か使命がある…」
春子「そだな事言われでも、何ばしたらいいのや？」
守「例えば、今日起きる事件を未然に防ぐとか」
春子「事件？」
守「何かありませんか？」
春子「どうだべ？ コンビニさ車が突っ込む事故なら起きるげんと。ほら、これ」
キャストの声「今日の午前十一時頃、栃木県宇都宮市のコンビニエンスストアに七十代男性が運転する車が突っ込む事故が

発生しました。この事故で、十代から五
十代の男女五人が重軽傷者を負って病院
へと搬送されました」
春子「車にふっ潰された高校生が死ぬんだ」
守「もしかして、これじゃないですか？ お
ばさんなら、その高校生が死ぬのを防ぐ
事が出来る」
春子「んだがもすんねげんと、んでも、なし
て何処の誰だも分がらね高校生ば助け
らんなねんだべ？」
守「もしかしたら、将来、人類を救う人なの
かも」
春子「はっ？」
守「何だっけ、救世主になる子どもを守る為
に、未来からマツチヨなおじさんが来る
映画ってありますよね？」
春子「知やね、オラ」
守「あんな感じ。おばさんがマツチヨなおじ
さんなんだ」
春子「オラが？：：：んだの？」
守「そんなの分かりっこないけど」
春子「：：：」
守「どっちにしても、死ぬ運命の人を助ける
なんて滅多に出来る事じゃないし、やっ
てみたらいよいよじゃないですか」
春子「んだげんとも：：：」
守「おばさんは宇都宮に行った事はあります
か？」
春子「ないな。お父さんが生ぎった頃に、鬼
怒川温泉さなら行った事あるげんと」
守「その時は車で行ったんですか？」
春子「んだね。お父さんの運転で行ったんだ」
守「おばさんは、車の運転は出来る？」
春子「出来ねな」
守「そしたら、別の方法で行くしかないか」
春子「ほだな、オラに分がるべが？」
守「スマホさえあれば簡単です。持ってます
か？」
春子「あるよ」
と、スマートフォンを取り出す。

守 「宇都宮に着くまで全部スマホが案内してくれませう」

スマートフォンで地図アプリを起動し、

守 「朝の七時四十分に山形駅から出る山形新幹線に乗れば、十時前には宇都宮駅に着きます。これなら事故が起きる十一時までコンビニに行けます」

春子 「山形駅までは何したらいいべ」

守 「六時五十五分に□□駅から列車が出るから、それに乗れば間に合います。僕だっ

たら駅まで自転車で三十分で行けるけど、おばさんはどれくらいかかりますか？」

春子 「自転車か？ もう何年も乗っていいねが

ら、乗れるかどうかは分がらねな」

守 「もししたら、タクシーを呼んだ方がいいか

もしれない。それで□□駅まで行って、

六時五十分発の山形新幹線に乗って宇都宮駅、

四十分発の山形新幹線に乗って宇都宮駅、

そこからまたタクシーでコンビニへ向か

います。決定！」

春子 「んでも、守くんよ、宇都宮とは随分と

遠いのんねが？」

守 「僕はこの夏休みに、お父さんに会いに一

人で東京まで行ったけど、そんなに遠く

は感じなかった。思ってたより全然近い

と思った。栃木は東京に比べたら半分の

距離ですよ。だったら、そんなに怖が

らなくてもいいんじゃないですか？」

春子 「：：んだら分がた。行ってみるべ。そ

したら、かいず（スマートフォン）の使

い方は教えでけねが？」

守 「分かりました」

○同・寝室

布団で眠る春子が夢でうなされている。

午前六時。

目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

○同・居間

日めくりカレンダーを破る春子。

八月二十日。

春子、電話をかける。

春子「もしもし、田辺と申しますけれど、おはようございます。あの、タクシーをお願いすっただいのだげんと」

○同・寝室

よそ行きの服で遠出の準備をする春子。

○同・居間

落ち着かない様子でタクシーが来るのを待つ春子。
柱時計が六時三十分を伝える。

○同・外

外に出てタクシーを待つ春子。

同じ所をくるくる回っていると、やがてタクシーが到着する。

タクシーに乗り込む春子。

春子「おはようございます。□□駅までお願いします」

○走るタクシー・車内

車窓の景色を見ている春子。
スマートフォンを見ると六時五十五分である。

運転手の市村に話しかける。

春子「悪いんだげんと、やっぱり山形駅まで行ってもらえらるべが」

市村「分かりました」

大通りでタクシーが渋滞に巻き込まれている。

春子「随分と混んでだね。事故でもあったんだべが？」

市村「この時間は、いつも朝の通勤ラッシュでなかなか進まないですね」

春子「んだのが」

×

×

×

踏切の遮断機が下りてタクシーが止まる。

在来線の線路を山形新幹線が走り抜けて行く。

遮断機が上がり、動き出すタクシー。

春子「今走ってったの、山形新幹線だべが？」

市村「んだねっす」

春子「：：間に合わねっけ」

市村「もしかしてお客さん、今の新幹線さ乗りだいつけのがっす？」

春子「んだっけのよ」

市村「したら、一時間後に次の新幹線が出るべがら、それさ乗るどいいのんねが？」

春子「例えばなんだけんと、もし明日、今の新幹線さ乗るとしたら、お宅の会社さ電

話する時に何てお願いしたらいいべ？」

市村「三十分でも早く、時間ば指定してもらえば間に合うのんねがな。」明日の何時

まで来てける」って予約してもらえば、その時間までには迎えに行きますから」

春子「朝六時に電話したのでは、どだいしても間に合わねが？」

市村「んだねっす。お客さんの家の近くさ営業所が無いもんだから、どうしても迎えに行くのさ時間が掛かるがらね。まあ、無理だべなあ」

春子「分かりました」

○ 柏木家・脱衣所

意味ありげに洗面台の鏡を見る守。

守「：：鏡を凝視する。」

守「：：イケメン。どの角度もイケメン。イケメンコンテストのグランプリは柏木守くんです！」

守「Tシャツの襟をまくり二の腕に力を込める。」

守「筋肉ヤバっ」

守「一人芝居を始める守。腕の筋肉凄くあれ？ 柏木くんって、腕の筋肉凄く

ない？」「えっ、そうかな？別に普通だと思うけど」「ムキムキじゃん！何かトレーニングしてるの？」「別に特別な事はしてないけど、毎日百回ずつ、腕立てと腹筋はしているかな」「凄い！だからこんなにもムキムキなんだ」。触ってもいい？」「しようがないな」。腹筋も見たい？」「」

守「わっ！」

曾祖母「何しってたのや？」

守「別に何もしてないよ」

○同・居間

守とその祖父、祖母、曾祖母がそうめんを食べている。

曾祖母「守、髪おがったのんねが？」

祖父「んだな」

守「「おがった」って何？」

曾祖母「じゃねばけっさげ、床屋さ行ってこいちゃ」

守「えっ？えっ？」

祖母「床屋で髪ば切ってこいって」

守「えーっ」

祖父「守も高校球児みだいに、丸刈りさするどいいのんねが」

守「丸刈りってボウズの事？」

祖父「んだ。守は俺の若い頃さ似っだから、ボウズ似合うべな」

守「え？そうかな？爺ちゃんはボウズだったの？」

祖父「んだ。小学校から高校出るまでずっとボウズよ」

守「へえー」

祖父「俺が守の歳の頃なて、学校一の男前って言われで、モテてモテて仕方ないっけぜ」

守「本当に？」

祖父「本当よー。おなごっていうのは何だかんだ言って、男らしい男が一番好きなの

よ。んだがら守も騙されだと思って、一回ボウズさしてみろ」
祖母「まーだ、へらこら出鱈目ばかり言つて。守も真に受げんなよ」
守「つうか、別にモテたくないし！」

○個人商店・外

守「アイスクリームを食べながらスマートフォンで高校野球を見ている。
守「あー、もう駄目じゃん。ボウズだ、ボウズ決定だ！ もう最悪っ！」

○理容店・外

守が理容店に來ると、店の前で春子が自転車に乗る練習をしている。
春子「おっ、おっ」
ぐるぐると同じ所を回る春子。

春子「乗るいな！ 乗るいな！」

守「こんにちは」

春子「いらっしやい！」

守「今日は休みですか？」

春子「やってだよ」

守「出掛けるんじゃないですか？」

春子「明日な。守くんからすれば、今日か」

守「え？」

春子「あ、いや、んねくてよ」

守「何の話ですか？」

春子「だがらオラ、タイムループしたのよ」

守「どういう事ですか？」

春子「同じ日は繰り返し返したの。覚えでねえど思うげんと、守くんさはこの話ば何回もしっただ」

守「…覚えてなくてすみません」

春子「仕方ないんだげんとよ」

守「それで、自転車で何処へ行くんですか？」

春子「□□駅まで行くの。そっから汽車で山形駅まで行って、そしたら山形新幹線さ乗って宇都宮まで行くんだ」

守「随分と遠くまで行くんですね」

春子「憶えでねえど思うげんと、これは守く

守 「僕ですか？」
んが言いだした事なんだ」

春子 「んだ、昨日な。守くんからすれば、今日か。取り敢えず、店さ入ってける」
理容店に入る春子と守。

○ 柏木家・奈緒子の部屋（夜）

奈緒子 「奈緒子が電話をしている。」

奈緒子 「出来るの早いでしょ？ 自分でも驚きなんだけど、そっちに居た頃の半分の時間で終わっちゃう。やっぱ環境がいいのかな？ 何より、うるさい上司と顔を会わせなくても済むってのが最高だよね」
髪が短くなった守がコーヒーカップを持って入ってくる。

奈緒子 「それじゃ、何か不具合とかあったら連絡頂戴ね。はい」

奈緒子 「奈緒子、電話を切ると守からコーヒーカップを受け取る。」

奈緒子 「うん、切った」
髪切った？」

奈緒子 「さっぱりしたね」
守 「そしたらさ、床屋のおばさん、変な事言うんだよ」

奈緒子 「変な事？」

守 「うん。タイムループして、同じ日を繰り返しているんだって」

奈緒子 「そう言うの？」

守 「うん。面白いよね」
奈緒子 「床屋のおばさんって、春子おばさんだよ」

守 「名前は知らないけど」

奈緒子 「春子おばさんは、守が通ってる塾に菜摘先生っているでしょ？ そのお母さんだよ」

守 「え？ そうなの？」

奈緒子 「知らなかった？」

守 「全然似てないじゃん」
奈緒子 「似てない？」
守 「うん。似てないよ……でも、言われてみ

奈緒子「似てるかも」
奈緒子「似てる？」
守「うん。似てる。それでさ、おばさんはタ
イムループから抜け出す為に宇都宮に行
かないといけないんだって」
奈緒子「どうして？」
守「おばさんが言うには、僕がそう言ったら
しいんだ」
奈緒子「守が言ったの？」
守「言っていないよ。だから不思議なんだ。お
ばさんは同じ日を繰り返して、何回
も僕と話をして、何回も僕の髪を切って
いるんだ。その僕とこの僕って同じ僕？
違うよね？ 所したら、昨日の僕と今日
の僕は違う？ それは同じ僕？」
奈緒子「うーん：：難しいね」
守「だよ。全然訳が分からないよ！」
奈緒子「結局どうなったか、明日にでも春子
おばさんに聞きに行ったらいいじゃない」
守「そっか、そうだね。そうする。でもさ、
奈緒子「同じ日を繰り返すなんて、羨ましいよね」
奈緒子「どうして？」
守「そしたら、ずっと夏休みじゃん」
奈緒子「学校に行くの、嫌？」
守「そうじゃないよ。そうじゃないけどさ、
山形の夏休み、短過ぎ！」
奈緒子「東京の方が良かった？」
守「まあ、夏休みはね。その分、冬休みは長
いでしょ？」
奈緒子「言う程変わんないよ」
守「何だよそれ！」
奈緒子「でもお母さんは、同じ日を繰り返す
のなんて嫌だな」
守「なんで？」
奈緒子「だって、今日一日かけて書いたプロ
グラムが無かった事になるじゃん」
守「結局、仕事？」
奈緒子「（笑う）そうだね。それに、今、こ
うやって守と話した事も無かった事にな
るんだよ。そんなの嫌じゃない？」

守「そっか。それはそうかも」

○集落の風景

集落にサイレンが鳴り響く。

○柏木家・守の部屋

サイレンの音で目を覚ます守。

守「何だよ、これ！　うるさい！」

○道

通学する守。

理容店の近くまで来ると、野次馬の人大かりが出来ている。

守「何？」

理容店の近くにはパトカーや救急車が停まっている。

猟友会がクマの亡骸を運んで行く。

野次馬の中に勇氣と翼を見つける守。

守「あのかいのは何？」

勇氣「クマ。家から出てきたんだって」

守「えっ？　それじゃ、おばさんは？」

理容店の中から救急隊員が春子をストレッチャ―で運んで行く。

野次馬の中のフミエが声を上げる。

フミエ「春子ちゃん！　なしてだず！」

続くように野次馬たちが声を上げる。

守「そんな……」

○農道

通学路を歩く守と勇氣と翼。

勇氣「俺、この間、髪を切ってもらったばかりだったんだよな」

守「僕は昨日」

勇氣「それじゃ、おばさんの最後の客だったかもな……まさか、こんな事になるなんて、信じられないよ。もう会えないなんてさ」

翼、泣いている。

三人の背後、自転車に乗った人の影が見える。

守「：：昨日、店に行った時、おばさん、不思議な話をしていたんだ」

勇氣「何？」

守「自分はタイムループをしていて、何回も同じ日を繰り返しているって」

勇氣「何それ？」

守「でも僕、何だか分かった気がするよ。もしかしたらおばさんは、何回もクマに殺されながら、この運命を回避する為に平行世界を移動しているのかもしれない」

翼「どういう事？」

勇氣「つまり、別の世界でまだ生きているって事？」

守「そう」

翼「そんなのどうして分かるんだよ」

守「分からない。今の人類の科学では証明出来ない。でも、想像なら出来るよ」

勇氣「想像？」

翼「そんなのただの現実逃避だよ」

守「そうかも知れないけれど、信じてみてよ。今、後ろから、おばさんが自転車を漕いで来るよ」

背後から近づいてくる自転車は春子である。

守「ほら、僕らを追い抜いていくよ、ほら！」

ハツラツとした顔で守たちを追い抜く

春子。

ペダルを強く踏み込んで走り抜けていく。

春子の幻を見送る守と勇氣と翼。

翼「：：見えた？」

勇氣「見えた気がする」

○地元の駅・外

平行世界。

春子が自転車で走ってくる。

駐輪場に自転車を止め、券売機で乗車券を買う。

○同・ホームへ列車・車内

出発のベルが鳴っている。
停車している列車に乗り込む春子。
列車のドアが閉まる。
春子「間に合った……」

○走る列車・車内
座席に座り、車窓の風景を見る春子。
アナウンスの声「次は山形、山形」

○山形駅・構内
スマートフォンを見ながら、辺りを見まわす春子。
みどりの窓口を見つける。
春子「あった」

○山形新幹線・車内
座席に座り、駅弁を食べる春子。

○宇都宮駅→タクシー・車内
春子がスマートフォンを手に駅から出てくる。
タクシ―乗り場まで来ると、先頭タクシ―の二岡がドアを開ける。

二岡「どちらまで行かれますか？」
春子「△△町のコンビニまでお願いします」

二岡「△△町のコンビニって何軒ありますか？」
春子「えっと、近頃コンビニ強盗に入らった店は分かりますか？」

二岡「あー、分かりました」
と、タクシ―を発進させる。

二岡「あのコンビニね、前にも強盗に入られたんですよ。二、三年なるかな？」
春子「そうですか」

二岡「やっぱり強盗にも入り易い店と、入り辛い店とがあるんでしょうね。だから私、またいつかあの店に強盗が入るんじゃないかと思っています。ほら、二度ある事は三度あるって言うでしょ？ と

ここで、お客さんは何しにあの店に行く
んですか？」
春子「え？ オラが？」
二岡「もしかして強盗？」
春子「いや、まさか」
二岡「冗談ですよ、冗談」
× × ×
タクシーは目的のコンビニの駐車場へ
と到着する。
二岡「到着しました」
春子、コンビニに目を向けると、店の
ガラス越しに立ち読みしている男子高
校生の姿が見える。
春子「間に合った……」
二岡「千八百円ですね」
春子、財布を取り出すとスマートフォ
ンが鳴る。
画面を見ると菜摘からの電話。
通話方法が分からず慌てる春子。
二岡「通話ボタンをスーってやると出れます
よ」
春子「スーって？」
二岡「貸してもらっていいですか？」
と、スマートフォンの通話ボタンをス
ライドする。
春子「ありがと様」
と、電話に出る。
春子「はい、もしもし」
菜摘の声「お母さん、今、何処にいるの？」
春子「何処って……：ちよつと、畑さ」
菜摘の声「栃木に畑が有るの？」
春子「えっ？」
菜摘の声「スマホのGPSで、お母さんが今
いるのは栃木の宇都宮ってなってるんだ
けど、そうなの？」
春子「いやー、んだが？ なしてだべ？」
菜摘の声「誤魔化さないで。なんでそんな所
にいる訳？」
春子「ちよつと、用事があって」
菜摘の声「どんな用事？」

春子「いやー、んだがらよ……」
菜摘の声「何よ？」
春子「いやー、あのー」
菜摘の声「はつきり言ってよ、子どもじゃないんだから！」
二岡「大丈夫ですか？」
菜摘の声「……誰？ 誰かと一緒なの？」
春子「いや、んねくてよ……」
二岡「代わりましょうか？」
二岡、春子のスマートフォンを受け取る。
二岡「もしもし、私、タクシー運転手の二岡と申します」
菜摘の声「タクシー運転手？」
二岡「はい。こちらのお客様を宇都宮駅から乗せておりました」
菜摘の声「ビデオ通話にしてもらえますか？」
二岡「はい」
と、ビデオ通話に切り替える。
画面に菜摘が映る。
菜摘の声「車の中を見せて下さい」
二岡「分かりました」
菜摘の声「と、スマートフォンで車内を映す。すね」
二岡「そうです」
菜摘の声「どうしてそちらに行ったかは、分かりませんか？」
二岡「それは分かりませんけど、目的地はコンビニとの事でした」
菜摘の声「コンビニ？ なるほど、分かりました。それでは二岡さんをお願いしたい事があります」
二岡「何でしょう？」
菜摘の声「私の母を乗せたまま、山形まで送って頂く事は可能ですか？」
二岡「出来ますけど、十万円近く掛かると思っています。それでも宜しいですか？」
菜摘の声「……ですよね。ちょっと考えてもいいですか」

二岡 「はい」

菜摘 の声 「：：そしたら、こうしましょう。こちらから迎えに行きますので、迷子と
いう事で、母を最寄りの警察署に連れて
行ってもらえませんか？」

二岡 「分かりました。警察署ですわね」

春子 「えっ？」

菜摘 の声 「：：でもその場合、手続きやら何やらで、二岡さんにご迷惑をお掛けしますかね？」

二岡 「いえいえ、それ位の事は気になさらないで下さい」

菜摘 の声 「：：でも、そうすると、母は事情聴取されますか？」

二岡 「迷子ですから、名前と住所を聞かれる程度じゃないですか」

菜摘 の声 「母が犯罪に巻き込まれている可能性ってありませんか？ 宇都宮まで行ったら理由も、オレオレ詐欺に騙されてお金を渡しに行ったのかもしれない」

二岡 「なるほど」

春子 「ほだな、んねよ」

菜摘 の声 「もしそうだったら、結構面倒な事になりますよね。山形の田舎では、こういう噂ってあつという間に広まってしま
うんですよ」

二岡 「私も田舎の生まれなので分かります」

菜摘 の声 「なのでやっぱり、母を山形まで乗せて来て頂けますか」

二岡 「：：それならば、こうしませんか？ お母様を一時的にうちの営業所でお預かりいたします。なので、宇都宮まで迎えに来て下さい」

菜摘 の声 「そんな事、いいんですか？」

二岡 「ええ。大した心使いは出来ませんが、お預かり致します」

菜摘 の声 「それではお言葉に甘えさせて頂きます。ご面倒をお掛けしますが宜しくお願
いします」

二岡 「では、営業所に着きましたら折り返し

ご連絡致します」

と、通話が終わる。

二岡「お客様、すみませんが、このままうちの会社まで案内しますね」

タクシーを発進する二岡。

春子「止めでけろ！ 降りしてけろ！」

コンビニの男子高校生を見る春子。

駐車場にテレビで見た杉山のミニバンが入って来る。

窓ガラスに顔を張り付ける春子。

春子「あーっ！ 降りしてけろ！ この通り、お願いだからよ！」

○コンビニ・店内

杉山（78）が店に入ってくる。

レジで買い物物を済ませた客に続く様にタバコを注文する。

杉山「四十二番」

後方から声がある。

客「あの、並んでるんですけど」

見ると、棚の陰にレジに並ぶ列が出来ている。

慌ててもう一度タバコを注文する。

杉山「四十二番！」

店員「後ろに並んでもらえますか？」

杉山、踵を返して店を出ていく。

客「クソジジイ」

○杉山の車・車内

イライラした様子で車に乗り込む杉山。エンジンをかけ、シフトレバーを操作して後ろを見ながらアクセルを踏み込む。

しかし、シフトレバーがリバースではなくドライブに入っており、車輪止めでタイヤが止まっている為、車は動かない。

杉山「何だ、この野郎！」

アクセルを強く踏み込む杉山。キュルキュルとタイヤの音が響く。

○タクシー会社・社員食堂

テーブルで迎えを待つ春子。

テレビから事故を伝えるニュースの音が聞こえる。

キャスターの声「今日の午前十一時頃、栃木県宇都宮市のコンビニエンスストアに七十代男性が運転する車が突っ込む事故が発生しました」

別の席ではタクシーの運転手たちが食事をしている。

運転手 A 「あそのこのコンビニ、全国ニュースになってるよ」

運転手 B 「うわっ、本当だ」

テレビから目をそらす春子。

春子「…次こそは助けでやっからな」

直輝が入って来る。

直輝「お義母さん、心配しましたよ」

春子「直輝さん、こだい遠くまで来てもらって、悪れっけな」

直輝「いえいえ、お義母さんは何ともないですか？」

春子「うん。大丈夫」

直輝「そうですか。それでは帰りましょう」

○走る車内

直輝が運転する車。

助手席に春子が座っている。

直輝「お義母さん、一体何があったんです？」

春子「うん…」

直輝「どうしてこんな遠くまで来たんですか？」

春子「ちよっと用事があった」

直輝「それはそうでしょう。それが何かって話です」

春子「うん…」

直輝「正直に言うよ、菜摘はお義母さんがオレオレ詐欺に巻き込まれたと考えています」

春子「えっ？」

直輝「えっ？」

直輝「えっ？」

直輝「えっ？」

春子「えっ？」

春子「えっ？」

直輝 「お義母さんにはこれ位の財産があつて、これを始めています」

春子 「ほだな、違うよ」

直輝 「それならば、本当の事を教えて下さい」

春子 「：：あそごのコンビニさ、車が突っ込んでんたべ？」

直輝 「そうみたいです。それが？」

春子 「それば止めようと思ったの」

直輝 「：：それは、どういう事ですか？」

春子 「んだがら、先回りして、コンビニさ車が突っ込むのば止めようと思ったのよ」

直輝 「お義母さんは、コンビニに車が突っ込むのを知っていたって事ですか？」

春子 「んだ」

直輝 「つまり、予知していたって事ですか？」

春子 「んだのよ。分がってけっか？」

直輝 「：：お義母さん、それは止めましょう」

春子 「えっ？」

直輝 「もし、お義母さんの言ってる事が本当だとしても、その理由では菜摘が納得し

ません。それどころか、認知症だと言

い出すのが関の山です」

春子 「んだたて：：」

直輝 「お義母さんも嫌って程知っていると

いますが、菜摘は異常なまでに細かくて

面倒臭い性格です。今、大事なのはどう

やって菜摘を納得させるかです。その理

由では、余計面倒な事になるのが目に見

えています。だから止めましょう。他の

理由を考えましょう」

春子 「えー」

○藤田家・居間（夜）

春子 「この間テレビば観つたら、鬼怒川温泉

が映ってだっけのよ。それで昔、お父さ

んと鬼怒川温泉さ行ったのば思い出して、

懐かしくなつて、行つてみようと思つた

っけの」

菜摘 「旅館は？ 何処に泊まるつもりだったの？」

春子 「温泉さ着いでがら探すつもりだったの」

菜摘 「随分といい加減な旅行ね」

直輝 「そんな事ないよ。ほら、こうやって『るるぶ』も買ってるし」

菜摘 「と、栃木版の旅行雑誌を見せる。」

菜摘 「それじゃ、コンビニに向かった理由は？」

春子 「えっ？」

菜摘 「タクシートの運転手にコンビニに行くよ」

春子 「ん」とよ：：」

直輝 「それは、アレだよ。宇都宮から鬼怒川温泉までタクシードで行くのに、手持ちに不安があったから、コンビニの ATM でおろそうと思った：：：んですよね？」

春子 「：：：んだ、んだのよ」

菜摘 「何であなたが答えるの？」

直輝 「いや、車の中でそう言ってたからさ」

菜摘 「なんか怪しいわね」

直輝 「何はともあれ、お義母さんはただ旅行に行っただけで、別に何かあった訳じゃないって分かっただろ？ もういいんじゃないか？」

菜摘 「：：：腑に落ちない部分もあるけど、スマホの履歴に怪しいものも無かったし、今回は大目に見るわ」

安堵する春子と直輝。

春子 「黙って遠っがくまで出掛けて行って、心配かけて申し訳ありませんでした」

菜摘 「本当よ。今度旅行に行く時は、前もって連絡してよね」

直輝 「それじゃ、早く夕飯にしないか？ 折角買ってきた餃子が冷めちゃうよ」

菜摘 「と、お土産の餃子を指差す。」

菜摘 「「冷めちゃう」って、とっくに冷めてるでしょ」

直輝 「いや、さっき買ったばかりだから、まだ温かいよ」

歌手さなりたいと思ってだっけね」
彰「それじゃ、オーディションとか受けたりしたの？」
春子「歌の大会さ応募した事はあるよ。その時は予選ば通って決勝まで行ったの？」
彰「へー、凄い。それでどうなったの？」
春子「結局、決勝さは出ねがった」
彰「え？ どうして？」
春子「大勢の人の前で歌うのが恥ずかしくな
って、断ってしまったのよ」
彰「そっか。それはしょうがないね」
春子「んでも、あの時出ればよかったって、
今でも思ったりするね」
彰「婆ちゃんの家が床屋だったって事は、爺
ちゃんも婿だったの？」
春子「んだね。オラは一人っ子だっけがら、
家ば継ぐのに婿ばもらえって話さなって、
隣の農家だっけ爺ちゃんから婿さ来て、
もらったのよ」
彰「農家？ 爺ちゃんは猟師じゃないの？」
春子「理容師はオラだべした」
彰「えっ？」
春子「えっ？」
彰「あ、いや、理容師じゃなくて猟師」
春子「ああ、鉄砲撃ちの事が？ 爺ちゃんは
猟友会で鉄砲ば撃ってだっけげんと、本
業は農家よ」
彰「そうなんだ。それじゃ、クマ撃ちの天才
だったっていうのは本当？」
春子「猟友会の仲間たちからはそういう風に
言われでだっけね。三発の弾で四頭のク
マば仕留めるいって」
彰「そんな事出来るの？」
春子「本当に仕留めだがどうがは分がらねげ
んと、それ位の腕前だっけって話よ」
彰「凄いな。爺ちゃんが生きてたら、クマ撃
ちの話聞いたかったな」
春子「彰からほだな事言われだら、爺ちゃん
も喜んだっけべな」
彰「そしたら：：：なんで爺ちゃんは死んだ

春子「聞いてねえのが？」

彰「事故ってうのは聞いてるけど、どうい
う事故だったかは知らない」

春子「爺ちゃん畑に行く途中、土手でトラ
クターばひっくり返して、下敷きになっ
たのよ」

彰「そうなんだ。驚いた？」

春子「それはそれは驚いだね。昼ご飯ば作っ
ていたら警察がら電話かかってきて、慌
てで病院さ行ったんだ後で、死に目にも会わん
とつくに死んだ後で、死に目にも会わん
ねっけのよ」

彰「それは悲しいね」

春子「んだね」

彰「あー、疲れた」

と、テレビをつける。

リポーターの声「警察は車を運転していた栃
木県宇都宮市の無職・杉山一郎容疑者七
十九歳を過失運転致傷の疑いで逮捕しま
した」

彰「うわ、ヤバっ。ボケた年寄りが、あんな
でかい車に乗ってる時点で犯罪だよ」

春子「：：：こご、オラが寄ってだっけ店よ」

彰「このコンビニ？」

春子「んだ」

彰「本当に？ ちよっと、ヤバかったんじゃ
ないの？」

春子「んだのよ。あの時、お母さんから電話
来ねがったら、オラ、店の中で車からふ
っ潰さで死んでだっけの。んだがら、お
母さんは婆ちゃん命の恩人よ。なんぼ
感謝してもしきれね。んだがら彰にも、
お母さんの事は悪く言わねでほしいの」

×

消灯した部屋。

×

布団で眠る春子がふと目覚めます。

スマートフォン時計を見る。

午前三時二十分。

春子「：：：あれ？ 三時ば過ぎっだ！」

驚き、体を起こす春子。

考えを巡らせる。

春子「もしかししたら、オラの家んねど、同じ

日に戻らねんだべが？：：：んだどしたら、

どうするべ」

考える春子。

春子「：：：帰らんね」

立ち上がり、帰り支度をする春子。

布団をたたみ、ベッドで眠っている彰

の方を見ると、彰がこちらを見ている。

彰「婆ちゃん、どっか行くの？」

春子「：：：ちよっと出掛けてくる」

彰「こんな時間に？ 何で？」

春子「助けでけったい人がいるのよ」

彰「誰？」

春子「誰だかは知やねんだげんと」

彰「どうして知らない人を助けに行くの？」

春子「オラにししか出来ね事だがら」

彰「でも、知らない人なんでしょ？」

春子「んでも、助けでけったいんだ。後悔し

たぐないのよ」

彰「そうなんだ」

春子「んだがら、オラの代わりに、お父さん

とお母さんさ謝ってもらわんねが？」

彰「うん。分かった」

春子「宜しぐな」

部屋のドアに手を掛ける春子。

彰「婆ちゃんは優しいね」

春子「ほだな事ないよ」

彰「ほだな事あるよ」

春子「んだが？」

彰「んだよ」

春子「んだら、行ってくるな」

と、ドアを開けて部屋から出ていく。

彰「：：：絶対に帰って来てよ」

○同・外（夜）

玄関から出でくる春子。

振り返って家を眺めると、自宅へと歩

き始める。

○ドライブイン（夜）

駐車場に大型トラックが止まる。
運転手の三原が自販機コーナーで飲み物を買ってしていると背後から声がする。

春子「あの、すみません」

三原「うわ、びっくりした！」

春子「すみません」

三原「えっ？ 婆ちゃん、こんな時間にどうした？」

春子「□□町の方さって、行きますか？」

三原「行くけど、もしかしてヒツチハイク？」

春子「んだのよっす。もし宜しければ、乗せ
でってもらわんねがっす」

三原「別にいいよ」

春子「いいがっす？」

三原「いいけど、幽霊じゃないよね？」

春子「んねよっす。ちゃんと生きっただがら」

三原「まさか家出？」

春子「違うよっす。そういうのではないから」

三原「したら深夜徘徊か」

春子「ほだな、んねっ！ いいがら、乗せて
あべ！」

三原「と、大型トラックの助手席に乗り込む。
おいおい、強引だな」

○地元の駅・外（早朝）

大型トラックが止まり、春子が降りてくる。

春子「ありがと様な」

手を振って大型トラックを見送ると、
駐輪場へと向かう。

○農道（早朝）

空は明るみ始めている。
自転車を漕ぐ春子。

心細さを誤魔化そうと、ザ・ピーナツ
ツの『恋のバカンス』を口ずさむ。

春子「陽にやけたほよせて ささやいた約
束は 二人だけの秘めごと ためいきが

出ちゃう ああ恋のよろこびに バラ色の
の月日よ はじめてあなたを見た 恋の
バカンス」

○理容店・外（早朝）

自宅へ着く春子。
玄関の鍵を開けて家に入る。

○同・玄関く台所（早朝）

家にかかる春子。
不安げに周りを見渡す。
家の奥から物音が聞こえる。

春子「……何だ？」

廊下を進み、台所の戸に手を掛ける。

春子「……大丈夫だ……大丈夫だがら」

勇気を振り絞って戸を開ける春子。

勝手口の扉が開いているのが目に入る。

春子「……ん？」

よく見ると、目の前で黒くて大きい影
が食べ物を漁っている。

目を凝らす春子。

影の正体はクマである。

驚いて、口に手をあて、後ずさりする
春子。

クマ、春子に気が付いて体を起こすと、
咆哮を上げる。

絶叫する春子。

春子「ぎゃああああーっ！」

○同・寝室

布団で眠る春子が夢でうなされている。
午前六時。
目覚まし時計が鳴り、目を覚ます。

春子「……戻た？ 戻たのが？」

○同・台所

恐る恐る戸を開ける春子。
異変がない事を確認すると、シンクの
下から糠床を取り出し、キュウリを一
本取って丸かじりする。

春子「うん！ よし、行くが！」

○農道

必死に自転車を漕ぐ春子。

○理容店・居間

テーブルの上にスマートフォンが置いてある。

○タクシー・社内

春子に乗せたタクシーが、目的地である栃木県宇都宮市内のコンビニの駐車場へと到着する。

二岡「到着しました」

春子、用意していた千八百円を二岡に渡す。

二岡「丁度頂きますね」

後部座席のドアを開ける。

春子「ありがとうございます」

○コンビニ・店内

春子が店に入ってくる。

店の窓側で、立ち読みをする男子高校生を確認する春子。

そのまま、店を一周して見て回る。

窓越しに杉山の車が駐車場に止まるのが見える。

春子「来たな」

杉山が入店するタイミングを見計らって、会計の列に割り込む春子。

後ろから声がする。

客「あの、並んでいるんですけど」

春子「あらら、ごめんなさいね。列出来っだの気付がねで割り込んでしまった」

と、謝りながら列の後ろに並ぶ。

春子の後ろに並ぶ杉山。

○同・駐車場

杉山が店から出てくる。

車のドアを解錠すると、春子が声をか

ける。

春子「お宅さんの車だがつす？」

杉山「そうですね、何か？」

春子「いやー、いい車だと思って」

杉山「そうですね、ありがとうございます」

杉山「分かれますか？」

春子「分かりますよ：：高いっけべっす？」

杉山「買った当時はそうでしたけど、何十年も乗っていますからね。もう値打ちはないですよ」

春子「ほだな事ないべした」

杉山「いや、本当に。私と同じでオンボロですから（笑う）」

春子「もしたら、この車に乗って色々な所に行っただんじやないですか？」

杉山「そうですね。昔はよく旅行に行きましたね。女房と二人で北海道や九州を周った事もありますよ」

春子「それは凄いですね。運転するのが好きなんです」

杉山「はい」

春子「今でも運転の腕前は変わらないものですか？」

杉山「自分としてはそのつもりなんですけど、息子からすると私の運転に不安があるよ。うで、最近になって免許の返納を勧められました」

春子「そうですね。もしたら、免許返すのがつす？」

杉山「そうですね。歳も歳ですから、仕方ないと思っっていますよ」

春子「そうですね。それでは、事故を起こさないように気を付けて下さいね」

杉山「ありがとうございます」

杉山が車に乗り込むと、危なげなくバックで方向転換する。

杉山、春子に頭を下げると、道路へと発進する。

春子が店の方を見ると、男子高校生が

立ち読みを続けている。
振り返り、手を叩く春子。
春子「いがった、いがった。よくやった！」

○理容店・外

守が店の入口の張り紙を見ている。
張り紙には「旅行に出かけますので、
二十日と二十一日は休みます」と書いてある。

○旅館・部屋

仲居の案内で部屋に通される春子。
仲居「こちらのお部屋になります」
春子「ありがとうございます」
仲居「夕食は何時にお持ち致しますようか」
春子「んだらば、六時でお願いします」
仲居「かしこまりました。では、六時にお持ち致します」
仲居、部屋から出て行く。

春子がテレビの電源を入れると高校野球の中継が行われている。
実況の声「試合は九回の裏、4対3で酒田湊高校がリードしています。後を追う大洋学院の走者は2塁3塁。2アウト2ストライクのフルカウント、バッターは四番の大山です。さあ、緊張の瞬間！」
投手が振りかぶって球を投げる。
打者がバットを振ると、金属音が響く。

実況の声「おおっと、これは打ち上げた！このボールをキャッチすれば、酒田湊高校、念願の準決勝へと駒を進めます」
右翼手がフライをキャッチする。

実況の声「取りました！試合終了、山形の酒田湊高校が勝利しました！」

春子「えっ！勝った？なして変わってしまたんた？もしかしてオラのせい？」

○集落の風景

集落にサイレンが鳴り響く。

○ 柏木家・守の部屋
守「何だよ、これ！　音を覚ます守。」

○ 道
通学する守。
理容店の近くまで来ると、野次馬の人
守「何？」
だかりが出来ている。

理容店の近くにはパトカーや救急車が
停まっている。
猟友会がクマの亡骸を運んでいく。
野次馬の中に勇氣と翼を見つける守。
守「あのかいのは何？」
勇氣「クマ。家から出てきたんだって」
守「えっ？　ヤバっ！」

○ 農道

通学路を歩く守と勇氣と翼。
勇氣「：：俺、この間、髪を切ってもらった
ばっかだったんだよな」

守「：：」
翼「おばさん、いつも床屋代から「駄賃だ」
って言ってる、百円くれたよな」

勇氣「そうだったな」

翼「いい人だったよな」

勇氣「でもお前、美容室に行ってるじゃねえ
かよ！」

翼「最近はそうだけど」

勇氣「裏切り者！」

翼「確かに裏切ったけど、俺だって悲しいん
だよ！　もう、おばさんには会えないん
だよ！」

翼、泣く。

守「おばさん、死んでないと思うよ」

翼「何でそんな事分かるんだよ！」

守「昨日店に行ったら、旅行に行くから休む
って張り紙してあった」

勇氣「そしたら、家を留守にしてたって事？」
守「うん。多分」

勇気「だったら死んでねえじゃん！ 何だよ、

守「ごめん。なんか、盛り上がってたからさ」

翼「危なっ、危うく泣くところだった」

守「泣いてたじゃん」

翼「泣いてねえし」

勇気「いや、泣いてた」

勇気「泣く訳ないじゃん！」

勇気「つかお前、昨日、店に行ったのって、

もしかしてボウズにするつもりだった？」

守「そうだよ。そういう約束だし」

勇気「お前、ボウズは絶対に似合わないから、

やめといた方がいいよ」

翼「確かにやめた方がいい」

守「はあ？ 似合うんだけど！」

勇気「絶対に似合わない！」

翼「100パー似合わない！」

守「絶対に似合う！ 120パー似合う！」

翼「なんかお前、イメチェンして女子にモテ

ようとか考えてない？」

守「はあ？ 何でだよっ！ そんな訳ないじ

ゃん！」

○旅館・部屋

布団で眠る春子が目を覚ます。

部屋を見渡す。

春子「……終わった」

○理容店・外

自転車で帰宅する春子。

玄関の鍵が開いている事に気が付いて

戸を開けると、菜摘が出てくる。

菜摘「お母さん？」

春子「菜摘？」

菜摘「お母さん！ よかった！」

と、春子に抱きつく。

○同・台所

クマの侵入により滅茶苦茶に荒らされ

た跡。

隣の居間から電話をする菜摘の声が聞こえてくる。

菜摘の声「行方不明になっていた母ですけれども、無事に帰って来ました。やっばり旅行に行ってたみたいです。ええ、大変ご迷惑をおかけしました」

春子「ありゃー」

菜摘「二メートルはある大きなクマだったわ。腕も丸太みたいに太くて、あんなのにやられたら、ひとたまりもなかったと思う。きつと、お父さんが助けてくれたのね」

春子「んだな。お父さんのお陰だな。それから、菜摘にはいつも心配かけでばっかりで申し訳ないな」

菜摘「何よ、突然」

春子「いつも感謝ばしったんだ」

菜摘「やめてよ」

春子「んだげんとオラ、菜摘さお願いすっだい事があってよ」

菜摘「お願い？」

春子「うん。オラ、ハサミが使えるうちは、ここで床屋ば続けっだいのよ」

菜摘「えっ？」

春子「続けるって言っても、あと何年かだとは思うげんと」

菜摘「どうして続けたいの？」

春子「オラみだいなババアが髪ば切って、人の為さなれるだなんて、こだいも幸せな事なんてないがらよ。オラの生きがいなのよ。んだがら、どうしても続けっだいな。んだ。許してもらえっべが？」

菜摘「こんな時にそんな事を言い出すなんてズルいわよ」

春子「駄目か？」

菜摘「：：：続けたらいいじゃない」

春子「いいのが？」

菜摘「いいわよ。その代わり、二度とクマに

入られないようにリフォームしてよ」
春子「分がた。菜摘、ありがとう。ありがとう
様な」

春子、両手で菜摘の手を握る。

菜摘「…：糠味噌臭い」

春子「んだな」

笑い合う春子と菜摘。

○稲荷神社

お社にいなり寿司を供え、手を合わせる
春子。

春子「ありがとうございました。お陰様で命
拾いしました」

背後からキツネが春子を見ている。

○理容店・仏間

仏壇に手を合わせる春子。

春子「お父さん、ありがとう様。大変、助かり
ました」

と、夫の写真を見る。

○同・台所

キュウリを塩で揉んで新しい糠床に入
れる春子。

春子「今度こそは美味く漬かるべ」

店の方から「こんにちは」と、声が聞
こえる。

春子「はい」

○同・店内

入口に守が立っている。

守「こんにちは」

春子「いらっしゃい」

おわり

参考文献

ザ・ピーナッツ『恋のバカンス』
作詞…岩谷時子 作曲…宮川泰